

接触場面の相互行為における発話の協働構築：「引き取り」現象について
Collaborative Construction of Utterances in Interaction
during Contact Situations:
Regarding the Phenomenon of “Collaborative Utterances”

呉 楊 (Yang WU)¹

要旨

発話の協働構築に関する研究では、複数の話者が一つの発話を共に作り上げる現象がさまざまな視点から報告されている。本稿では、その一形態である「引き取り」（串田 2002）に注目し、日本語母語話者と非母語話者による三者間の自然会話を対象とし、会話分析の手法を用い、接触場面における引き取りがどのような契機で生起するのか、どのような相互行為的ふるまいをもたらすのかを、詳細に検討した。分析から、引き取りが生じる際には、文法的・意味的資源が発話の予測可能性を高める要因となっていることが明らかになった。また、引き取りが起こりやすい機会として、先行発話の進行が遅延していることや、トピックに関する知識の配分が不均衡であることが確認された。さらに、引き取りの連鎖を通じて「共同説明」という相互行為的実践が達成され、接触場面に特有の協働的な発話構築の在り方が示された。

キーワード：引き取り、会話分析、接触場面、相互行為、協働構築

Abstract

Research on the collaborative construction of utterances has examined how multiple speakers jointly produce a single utterance from different perspectives. This study focuses on *hikitori* (Kushida 2002), a type of collaborative utterance, in naturally occurring three-party conversations involving native and non-native speakers of Japanese. Adopting a conversation-analytic approach, this study investigates the interactional conditions that give rise to collaborative utterances in contact situations and the types of interactional practices it accomplishes. The analysis revealed that grammatical and semantic resources contribute to the predictability of utterances, thereby facilitating the emergence of collaborative utterances. It is also found that such utterances tend to occur when the

¹ 筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 博士後期課程。メール：s2436010@u.tsukuba.ac.jp.

preceding speaker's utterance is delayed or when there is an asymmetry in participants' knowledge distribution regarding the topic. Furthermore, through the sequential organization of these utterances, the interactional practice of "joint explanation" is accomplished, demonstrating a distinctive mode of collaborative construction of utterances characteristic of contact situations.

Keywords: Collaborative utterances, Conversation analysis, Contact situations, Interaction, Collaborative construction of utterances

1. はじめに

会話は一人では成立しない。会話参加者それぞれが話し手と聞き手をはじめとする様々な役割を担い、相互行為を協働的に構築し、展開している。複数の参加者による発話の協働構築に関する研究は多岐にわたるものの、その現象を表す日本語の専門用語はいまだ統一されていない。具体的には、「共話」（水谷1993）や「共同発話文」（宇佐美2006）、「引き取り」（串田2002；森本2002）、「ターンの共同構築」（林2017）など、研究者によって異なる用語が使用されている。本稿では、複数の会話参加者が一つの発話を協働的に構築する現象のうち、話者交替の観点から、発話の進行中にもう一人の参加者が、現行発話に統語的に連続する発話を産出する現象に注目する。この現象を捉えるため、串田（2002）が提唱した「引き取り」という分析概念を採用する。本概念は、統語的な連続性と相互行為の展開という両面から話者間の協働を精緻に記述することを可能にする。なお、「引き取り」の定義および理論的枠組みの詳細については、次節の「先行研究」で述べる。

引き取りを含む相互行為は、日本語の母語場面のみならず、非母語話者との接触場面においてもしばしば観察される。接触場面における日本語会話では、参加者間で共有される情報や知識、経験などが十分ではない場合や、母語の慣習に影響されることによって、意図をうまく伝えられず、会話の進行が滞ってしまう場面が見られる。こうした会話内の滞りを契機として、日本語の母語話者による非母語話者の発話の引き取りが開始されることがある。森本（2002）は、このような環境における引き取り行為は、会話の進行性を回復させるために利用されるとしている。この指摘は、会話参加者たちが円滑なコミュニケーションを実現するために、引き取りという相互行為的資源を戦略的に活用している可能性を示唆しているといえる。これらを踏まえ、本稿では、接触場面における引き取りのふるまいを詳細に検討することを通して、相互行為がいかに形成・組織化されるのかについて新たな知見を提示することを試みていく。

2. 先行研究と本稿の目的

先行研究では、会話分析の手法を用い、会話参加者による発話の協働構築現象に関する

一定の知見が蓄積されている（Lerner 1991; Hayashi 2003; 串田2002, 2006; 林 2017）。Lerner（1991）は、話者交替の観点から、複数の会話参加者が協働して一つの発話を構築し完結させる現象を、広義の「joint production²」の一種として位置づけ、後続発話が発せられる契機を分析する。Lerner & Takagi（1999）は、英語と日本語における発話のcollaborative completion/anticipatory completion³を比較し、文法構造の違いが予測的完了の生起位置に影響を与えることを示す。日本語では文末に重要情報が集中する傾向があるため、協働的完了は文の終盤で生じやすく、相互理解や共感の形成に寄与する。Hayashi（2003）、林（2017）は日本語会話におけるターンの共同構築⁴に着目し、その中での「先取り完了」（Lerner 2004; 串田2006）と「声をあわせた共同産出」が逸脱ではなく協調的行動として働いていることを示す。これらの実践は、理解・同意・知識の提示・共同説明といった社会行為の達成に寄与すると論じている。このように、会話参加者による発話の協働構築現象は、発話の完了予測や共同産出といった多様な形で実現されているが、どのような側面に着目するかは研究者によって異なる。中でも串田は、従来の語用論的・談話分析的研究では十分に重視されてこなかった、発話の構造上のつながりに注目している。串田（2002, 38）は、「一人の発話が完結しうる地点を迎える前に、もう一人がその発話に統語的に連続するようにデザインされた発話を行う現象」を「引き取り」と名付け、これを会話における協働構築の一形態として定義した。さらに、相互行為の視点から日本語会話における引き取り現象を詳細に分析している。

本稿がこの「引き取り」に注目するのは、話者交替の観点から、会話参加者がどのように相互に発話を組み立て、会話の進行や理解を協働的に達成しているのかという問いを焦点化するためである。つまり、「引き取り」は、単なる発話の継続ではなく、会話参加者が互いの発話をリアルタイムで分析・予測・補完しながら共同で発話を作り上げるという、相互行為の協働性を如実に示す実践の一つである。

まず、「引き取り」という現象の範囲を明確化する一助として、串田（2002）の先行研究を取り上げ、その分析枠組みを紹介する。串田（2002）は、「引き取り」の範囲を明確化するために、Sacks（1995）が用いた会話例とその分析を参照しつつ説明している。Sacksがこの現象に注目する契機となったのは、次のような会話例である。この例では、グループセラピーを受けている3人の少年（K、R、A）が、新たに入室してきた少年に対し、3人で一つの文を作り上げている。

² Joint production は宇佐美（2006）において「共同産出」と訳されている。

³ Collaborative completion/anticipatory completionは高木・細田・森田（2016）において「協働的完了・予期的完了」と訳されている。

⁴ ターンの共同構築とは、ある話者が開始したターンが完了する前に、もう一人の話者が参入し、最初の話者のターンを統語的に完了させるプラクティスである（林2017, 128-129）。

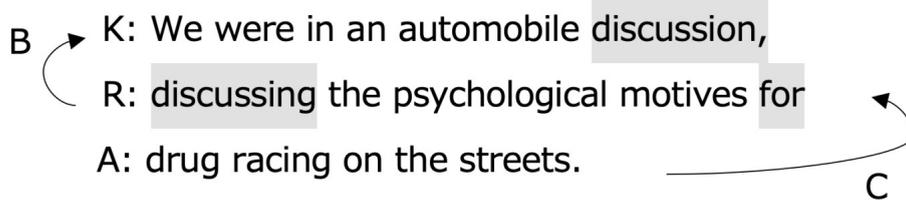


図1：グループセラピー場面における三者による引き取りの例（Sacks 1995: 71より）

串田（2002）は「引き取り」が生じる状況を、先行話者の発話終了部と後続話者の発話開始部に分け、以下の表1のように4類型に整理できるとしている。

		後続発話開始部	
		続きをいう	引き延ばす
先行発話 終了部	完了させる（完結可能点 ⁵ に達する）	A	B
	完了させない（完結可能点に達していない）	C	D

表1：引き取りの4種類（串田2002: 41より）

上記の会話の参加者であるRとAの発話は、それぞれ先行発話に統語的に連続するようにデザインされているが、異なる特徴があるという。Rの発話は、Kの発話の完結可能点に達した発話をさらに引き延ばすB類型であり、Aの発話は、Rの発話の完結可能点に達する前の段階でその続きをいうC類型である。Lerner（1996）は、引き取りを会話参加者が単一の統語的単位を共同で産出する実践と位置づけ、上表のA型に該当するものを「co-participant completion⁶」と呼び、A型のみ分析の対象を限定している。串田（2002）は、日本語会話における発話の完結可能点自体がしばしば不明確であることを理由に、AとCの類型、すなわち、先行発話の終了部が完了するかどうかに関わらず、発話開始部が先行発話を統語的に引き継ぐ形式に注目して分析を行っている。彼は、英語の研究を踏まえ、日本語会話においても、「統語的単位の開放性」が見られるとし、聞き手が話し手の発話の統語的な続きを予測し「引き取り」が実践できると指摘する。

次に、串田（2002）は、Lernerらによる引き取りの「予測可能性」と「進行性」という2種類の契機の分類が十分に説明できない点を指摘し、発話の韻律的特徴や視線など、非言語的行為を含めた詳細な分析の必要性を論じている。しかし同時に、自身の使用した

⁵ Transition Relevance Place (TRP)：順番構成単位 (TCU: turn construction unit) の最初の完結可能な時点が最初の順番の移行に適切な場所である（高木ほか2016, 53）。

⁶ Co-participant completionは林（2017）において「共-参加者による完了」と訳されている。

データには韻律や視線の精緻な観察には限界があることも認めている（串田2002, 44）。本研究では、串田（2002）が指摘した課題に応答し、ビデオデータを用いることで、発話の統語的連続性に加え、会話参加者の周辺言語的・非言語行為も含めて「引き取り」の実践過程を捉えることを試みる。特に、串田（2002）が提示したAとCの類型に加え、それとは厳密には異なる、変則的な形で引き取りが行われている事例にも目を向ける。

また、串田（2002）が提示した複数のシークエンス環境のうち、「共同説明」は、複数の話者が協働的に情報を提示・補足しながら、共有知識をもたない他者に向けて説明を構築する場面である。このような環境では、話者間での理解の調整や説明の補完が動的に行われ、相互行為が緊密に展開する。本研究が対象とする「引き取り」は、このような協働的な相互行為の中で頻繁に観察される現象であり、「共同説明」のシークエンス環境はその特徴を検討するうえで有効な分析枠組みとなる。したがって、本研究では、従来十分に検討されてこなかった「協働的説明過程における引き取り」が、会話の進行や参加者間の理解共有にどのように関与しているのかを明らかにすることを目指す。

本稿では、接触場面における相互行為を分析していく。接触場面において引き取り現象を対象とした事例は、日本人同士の会話場面と比較すると非常に限られている。森本（2002）は、日本語がそれほど流暢に話せない非母語話者が参加する接触場面では、引き取りがより頻繁に発生し、それが会話の進行に大きな影響を与えると指摘している。森本は、引き取りの類型として串田（2002）のAとC型を援用し、日本語母語話者と非母語話者各2名による会話を分析した。その結果、母語話者による非母語話者発話の引き取りが、会話内の滞りを契機に開始され、参加者が会話の進行への指向性を示す実践であることが明らかとなった。森本（2002）は、発話の滞りを放置すれば会話の滞りはなかなか解消されずジレンマに陥る一方で、引き取りは「すでにその知識にアクセスできている」ことを表示するという特質を利用することで、発話権の侵害の度合いを低くしつつ、会話の進行性を回復する有効な手続きだと指摘している。ただし、森本（2002）は、非母語話者が関与する場面における引き取りを、主に発話の進行性の回復という観点から捉えており、参与者間の知識の配分や認識的關係といった相互行為的側面の精緻な検討は十分ではなかった。これらの知見は、発話の滞りやトピックに関する知識の配分における非対称性が生じやすい接触場面において、引き取りが果たす役割の重要性を示唆している。

以上の先行研究を踏まえ、本稿ではこれらの限界を補うため、日本語母語話者（以下JNと表記）と非母語話者（以下CNと表記）による三者間の自然会話を対象とし、接触場面における引き取り現象の相互行為的メカニズムを明らかにすることを目的として分析を行う。接触場面においては、非母語話者の発話を母語話者が引き取る事例が多く報告されている。こうした場面では、発話の停滞や会話の進行の不均衡、トピックに関する知識の

配分の偏りなどが生じやすいと考えられる。その一方で参加者は、互いの知識や言語能力の差異を補い合いながら協働を行い、これらの差異が相互行為の資源として積極的に活用される場合も少なくない。このような事例を分析することによって、接触場面における相互行為の組織化のあり方に関して新たな知見を得ることができると考えられる。

分析にあたっては、串田（2002）が示した引き取りのA・C類型およびその生起するシーケンス環境、ならびに森本（2002）の知見を参照し、先行話者の発話が滞った際に後続話者が引き取りを通じてどのように会話の進行を回復するのかを検討する。とりわけ本稿では、非母語話者が参加する接触場面に特有の相互行為的条件に着目し、発話の協働的構築において引き取りがどのような契機で生じ、いかに非言語的資源と結びついて遂行されるのかを明らかにする。また、引き取りを通して達成される相互行為的成果が、会話参加者間の理解の共有やトピックの推進にいかに関与しているかについても考察する。

3. 研究手法と調査概要

3. 1 会話分析について

会話分析は、1960年代にSacks, Schegloff & Jeffersonによって確立された質的研究方法であり、エスノメソドロジーの観点から会話という社会的相互行為形態を分析するものである。この手法により、会話参加者がその場で構築するリアルタイムな相互行為を観察し、人々が協働的に社会的秩序を形成・維持する過程を解明することが可能となる。

会話分析の特徴は、会話参加者の観点から相互行為を記述する点にある。これにより、発話内容、意図、先行発話との関連性を、データに基づいて客観的に分析できる。また、言語要素に加え、間合い、割り込み、プロソディ、身体動作といった周辺言語的・非言語要素も詳細に考察できる。

3. 2 調査とデータの概要

本稿のデータ収録への協力者は、JN3名（N1、N2、N3）とCN5名（C1、C2、C3、C4、C5）の計8名である。この8名の協力者をCN2名とJN1名の組み合わせで3つのグループに分け、それぞれのグループで収録を行った。データは、3組を合わせて、計約180分である。①組はC1・C2・N1、②組はC2・C3・N2、③組はC4・C5・N3である。具体的には次の表2に示す。

本調査では、グループ①と②が国際交流を目的としたNPOの運営する談話スペース⁷において、グループ③はZ大学図書館のセミナー室で収録した。事前に団体代表者へ撮影許可を依頼し、承諾書に署名をいただいた。また、当日も研究趣旨を説明し、協力者から録

⁷ このスペースは、日本人ボランティアと外国人が日本語で自由に会話や相談を行うサロンとして運営され、異なる言語・文化的背景をもつ人々の相互行為が日常的に見られる「接触場面」である。

画・録音の許可と署名を得た。音質の確保や手振りなど非言語要素の観察のため、ICレコーダーとビデオカメラを併用した。データ観察では、2名の会話参加者が1つの発話を作り上げる現象に着目し、トランスクリプトの記号は高木ほか（2016）に準じた。

	年代	日本語能力	職種	性別	会話グループ
C1	20	中級レベル	留学生	女	①
C2	20	上級レベル	会社員	女	①②
C3	20	上級レベル	会社員	女	②
C4	20	中級レベル	留学生	女	③
C5	20	上級レベル	留学生	女	③
N1	50	JN	ボランティア職員	女	①
N2	50	JN	会社員	男	②
N3	20	JN	大学院生	女	③

表2：データ収録協力者

4. 分析と考察

本節では、接触場面における引き取りを含む具体例を取り上げ、分析を行う。まず4. 1節では、本稿の事例に基づき「協働的ターン連鎖」の組み立て方を述べる。続く4. 2節では、引き取りが生じる際に予測可能性を生み出す文法的・意味的資源を検討する。さらに4. 3節では、引き取りが生じる契機に関連し、発話進行を遅らせる産出上の特徴に注目する。最後に4. 4節では、引き取りの連鎖を通じて、「共同説明」という相互行為がいかに達成されるかを論じる。

4. 1 「協働的ターン連鎖」の組み立て方

串田（2006）は、「引き取り」を含む会話の相互行為を構築中におけるターン内部の話し手と聞き手が協働的にターンを完了させる現象を「先取り完了（pre-emptive completion）」と呼んでいる。串田（2006）はLerner（2004, 229）を参照し、「先取り完了」がターン開始者に向けて発せられると、ターン開始者がそれを承認したり拒否したりする「協働的ターン連鎖」（collaborative turn sequence）の構造を、以下の図2のように整理している。

1. →X: ターン構成単位の開始 (引き取られた発話) 先行発話
2. ⇒Y: (X が開始したターン構成単位の) 先取り完了 (引き取った発話) 後続発話
3. X: (Y が行った先取り完了の) 承認・拒否

図2 : 「協働的ターン連鎖」の組み立て方 (串田2006: 164より; 一部修正あり)

本稿では、接触場面における「協働的ターン連鎖」の組み立て方について、串田(2006)が指摘した「協働的ターン連鎖」の2つのタイプ(A、B)が観察されることを明らかにした。「協働的ターン連鎖」のタイプAとは、先行話者が進行中の発話を、後続話者が統語的に接続する形で引き継いで完了させる「先取り完了」である。対してタイプBは、「先取り完了」の発話が先行話者の発話とオーバーラップしているものである。検証した事例から、「協働的ターン連鎖」の組み立て方を以下の図3にまとめる。

①タイプA

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1→N2 : うん,あと大体= | <ターン構成単位の開始> |
| 2⇒C3 : =自由に. | <先取り完了> |
| 3 N2 : うん,そうそう,うん. | <承認> |

②タイプB

- | | |
|---------------------------------------|-------------------|
| 1→C1 : はい,¥中国(.)中国から来た観光客(h)が(h) [多い. | <ターン構成単位の開始> |
| 2⇒N1 : | [いっぱいだった. <先取り完了> |
| 3 C1 : はい,いっぱい- | <承認> |

図3 : 本研究における「協働的ターン連鎖」の組み立て方

実際のデータを観察してみると、タイプAおよびタイプBのいずれも確認された。本稿では、接触場面における「協働的ターン連鎖」のタイプAおよびタイプBに該当する代表的な事例をそれぞれ取り上げ、具体的な分析を行う。次に4. 2節において、後続話者が先行発話を完了させる際、統語的な続きの予測を可能にする資源について考察する。

4. 2 予測可能性を生み出すもの

Lerner (1991, 442) は、引き取りが行われる契機として、統語構造における「先行要素 (preliminary component) 」と「最終要素 (final component) 」からなるTCUタイプを指摘している。ここで、順番構成単位 (TCU: turn construction unit) とは、話し手が順番を構成する最小単位であり、受け手がその終結位置や終わり方をおおむね予測できる構造をもつ (高木ほか2016, 52) 。例えば、「if-X」の先行要素が産出されると、最終要素「then-Y」の産出が予測可能となる。串田・平本・林 (2017, 165) は日

本語には、「XたらY」や「XからY」など、従属節と主節を含む複文構造のTCUが存在することを指摘している。林（2017）によれば、聞き手が進行中のターンを統語的に継続・完了させるためには、発話が統語的にどのような軌道を辿って完了点まで到達するかをリアルタイムで予測できなければならない。こうした予測可能性はある種の相互行為の要素によって支えられており、「どのような相互行為上の資源がそれを高め、発話の共同構築を可能にするのか」が課題とされる（林2017, 130）。

本稿で使用したデータにおいても、発話の引き取りが、文法的小よび意味的な資源が整い、先行発話が予測可能になった場面で行われることがしばしば見られる。以下では、予測を可能にさせる要素として「統語的構造」と「比較表現」という二つの側面を取り上げ、三つの事例を考察する。断片1の直前では、N2が会社の忘年会の状況や食事代について語り、それに対してC3は同意を示していた。断片前の発話から、C3とN2はパートナー会社で共に働いており、年末にはほぼ毎週忘年会が行われるという慣行があることが確認できる。

[断片1] [飲み会]

1. C3: で,それから2次会3次会e[hehehehehehehehehehe[.heh
2. C2: [ehehehehehehehehehehe [he
3. N2: [うん.
4. N2: 2次会3次会はあまり行かないけども.
5. C2: お: : う(h)ん(h)hehe
6. →N2: うん,あと大体=
7. ⇒C3: =自由に.
8. N2: うん,そうそう,うん.

C3は1行目で「で」と発し、忘年会の後2・3次会に言及すると、C2とC3は同時に笑いを産出する。N2は3行目で承認後、自身は2・3次会にあまり参加しないと主張した（4行目）。C2は5行目で笑いを挟んで承認・共感を含んだ応答を示し、N2の語りの継続を円滑に支えているように見える。続くN2が6行目で「うん」と承認し、「あと大体=」と発したタイミングで、C3が即座に「自由に。」（7行目）を産出するのは、先行発話の統語的続きとしてデザインされていることを表している。それをN2が8行目で承認することにより、6行目から始めた「協働的ターン連鎖」のタイプAを完了させる。

ここで、7行目のC3の発話に注目してみたい。まず、なぜC3がN2の発話をあらかじめ予測し、先取り完了を達成できたのだろうか。N2は、2人が笑いながら受け止めた後、C3の補足説明を承認し（3行目）、再びターンを開始する（4行目）。この際、N2は自身が2次会・3次会にはあまり行かないと述べ、C2から承認を得ている（5行目）。このやり取りから、この場面でC3とN2はC2に対して、自社における忘年会の慣行を共同で説明可能な立場にあることがわかる。そして、両者の共有知識に基づいて協働的な説明が成立

している。また、断片前の会話では、N2が忘年会の食事代を説明し、C2から承認を得ている。その流れの中で1行目でC3が接続詞「で」を使ってターンを開始し、前の発話に接続する形で説明を補足しているというのもまさにそのことに志向しているからだといえる。

もう1点、7行目の「自由に。」が、TCUとして完了しているという点についても補足したい。「に」のような助詞で終わる発話は規範文法的に完結していないものとして捉えられる。しかし、会話分析におけるターン構造（TCU）の観点からは、TCUの完結は必ずしも文法的な完結性と一致しない。ここでは、末尾が下降調で産出されており、C3は述部を追加せずとも行為として完了していることが示される。その理由は以下の通りである。C3は1行目で「2次会3次会」というトピックを提示し、N2も4行目で同じ語を用いて自身の立場（「あまり行かない」）を明示している。そのため、6・7行目における「あと大体」「自由に」という発話は、先行部分に関連づけて理解される。具体的には、N2の発話を受けて、「（2次会3次会への参加は）自由に」という意味内容が予測可能であり、「自由に」と産出された時点で、その予測が言語的に具現化され、行為として完結していると解釈できる。さらに、6行目と7行目の発話は、一つのTCUを構成し、完結しているともみなすことができる。ゆえに、7行目の「自由に。」は6行目のN2の発話を先取り完了するものだと言える。

本事例は、「協働的ターン連鎖」のタイプAに該当する典型例である。ただし、しばしば見られるJNによる引き取りとは異なり、共通知識を共有するCNが積極的にターンを取り、引き取りを完了させている点に特徴がある。この点については、後述の4.4節で詳述する。

次に、図3に示されたタイプBの事例を検討する。断片の直前では、日本の山を訪れたことがあるかというN1の質問に対して、C1が否定的な応答を産出している。

[断片2][観光客]

1. C1: 先週は:あのう(.)浅草にい[き]ました。
2. N1: [うん,あそうですか.]
3. C1: ¥あ(h)のて-あの>寺の名前<は: ((目線が左上を向いたながら話す))
4. N1: 浅草寺[ですね. う: [ん.]
5. C1: [¥浅(h)草(h)寺 [h¥浅(h)草(h)寺で参拝[し]ました。
6. N1: [あ,そうでしたか.]
7. C1: はい.
8. N1: いっぱい人がいたんじゃないですか.=
9. →C1: =はい,¥中国(.)中国から来た観光客 (h) が (h) [多い.]
10. ⇒N1: [いっぱいだった.]
11. C1: [はい,いっばいで-
12. N1: [うん(.)うん.]

C1は1行目で「先週は：あのう(.)浅草にいきました。」と発し、新たな話題を開始する。ここから7行目までの間で、C1は浅草寺で参拝したことを明らかにする。N1は8行目で否定疑問の形式で質問を産出し、浅草寺に関して「いっぱい人がいる」ことが前提に、それを肯定する反応が期待される質問を産出する。つまり、この8行目N1の発話から新しい連鎖が始まっているといえる。それに対して、C1がまず肯定的に応答し（「はい」）、さらに「中国から来た観光客が多い」と産出する（9行目）。N1は、C1の「中国から来た観光客が」と格助詞「が」が生じたタイミングで、C1の発話の統語的続き（述語）を予測し、「いっぱいだった」という言い方で発話を引き取り、完了させる。C1はN1の発話と重なる形で、自身の発話の述部として「多い」と産出する。しかし、その後、C1が11行目でN1が引き取った発話を承認し、かつ復唱することにより、「協働的ターン連鎖」を完結させる。

なぜN1がC1の発話の述部を予測できたのかということに関して、二つの理由が考えられる。一つは、C1の発話が「中国から来た観光客が」まで進行したところで、これから産出される残りのTCUは、文法的に述語に相当するものであろうという予測可能性が高まるからである。TCUが完了可能点に近づけば近づくほど、完了可能点までに産出される発話部分の予測性は高くなる（串田ほか2017, 165）。C1の応答の部分における格助詞「が」の次に述語がくることは、統語的構造から見ても予測可能であったと考えられる。もう一つの理由は、N1が8行目の質問において「いっぱい人がいた」という言い方を用いていることである。それまでの発話で、浅草にあるお寺の名前を聞かれたN1は浅草寺の名前を提示する。このことから、N1の方がC1よりも浅草についてある程度の知識があるということは明らかだといえる。さらに、8行目の質問を否定疑問の形式、すなわち、質問において前提していることについて確信があることを示す形式で産出できていることも、その証拠だといえる。そして、それに対するC1の応答が「はい」という肯定の形式で開始されているため、N1の予測通り「いっぱい人がいた」という応答になることは確実に予測可能になったといえる。この断片は「協働的ターン連鎖」の図3に示されたタイプBに該当する。

9・10行目では、C1とN1が「多い」と「いっぱいだった」という意味的に類似したが異なる表現を、オーバーラップした完結部でそれぞれ産出している。後続話者が先取り完了で産出する内容は、先行話者の発話との統語的な連続性が必要であり、かつ、先行話者のそこまでの発話を理解した上でその先の部分を予測したものであるが、必ずしも先行話者と全く同一の言語形式を産出するとは限らない。加えて注目すべき点は、C1が11行目で単に10行目の「いっぱいだった。」に対して「はい」と承認するにとどまらず、自身が引き取られた発話（9行目）に含まれていた「多い」という語を、「いっぱい」に置き換えて産出している点である。すなわち、CNの発話は、JNに引き取られた際に語彙的な修正が加えられ、その修正をCNが11行目で承認すると同時に、承認のターン内で自己修

復⁸を行っているのである。このようなプロセスは、接触場面に特有の引き取りの在り方である可能性がある。C1の9行目の発話は、間合いや笑いを挟みながら産出されており、発話の進行に一時的な滞りがあったといえる。そのため、N1は発話途中に「が」を聞いたタイミングで、予測可能となった「いっぱいだった」を先取り完了する形で産出したといえる。C1が実際に産出した述語は「多い」であり、N1が産出した「いっぱい」と比較すると、よりフォーマルであるものの文法的に正確な過去形ではなく、基本形であった。そして前述の通り、C1はN1の「いっぱいだった」（10行目）を受けて、11行目で「いっぱい-」と繰り返すことで承認を行う。このC1の言語的置き換えは、N1の語彙選択を言語的規範と見なし、自身の表現をN1の表現に置き換える修復を行った可能性を示唆するといえる。

以上のように、「協働的ターン連鎖」における承認の位置で、JNが提示した評価語「いっぱい（だった）」（8・10行目）をCNが再利用する現象は、接触場面において参加者が相手の語彙を取り入れ、それを応答や評価に用いる語彙的な協調・模倣のプロセスの一端として捉えることができる。本稿では、こうした語彙の再利用の在り方を仮に「語彙的同調」と呼ぶことにする。なお、12行目N1の「うん(.)うん」は、11行目C1の発話と重なっている。そのためN1の承認（12行目）は、10行目の「いっぱいだった」と発話する間にC1が「多い」と述べて9行目の発話を完結させたことを受けているといえる。この重なりと意味的な合致から、N1はC1の発話内容（9行目）を確認し、受け止めていると解釈できる。断片2も統語的構造から述語の部分が予測可能となり、引き取りが行われた事例であった。

次に「より」という比較表現を用いる環境において、話者がどのように「比較」の構造を構築しているかを、以下の断片3によって示す。ここでいう比較構造とは、ある対象を他の対象と対照し、参照基準を提示した上で、その比較によって対象の特性や程度を示す構造を指す。断片の前では、C5はN3がある女性歌手のコンサートへ行く頻度を確認していた。

[断片3] [チケット]

1. C5: え,チケットはどのくらいですか値段=
2. N3: =値段6千円くらいかな.
3. →C5: あ-じゃあ,大体なんかジャニーズ: :
4. ⇒N3: より↓は [少し: [安い
5. ⇒C5: [少ない[安い[ですよ.
6. N3: [うん.

⁸ 高木ほか（2016, 183）は、Sacks, Schegloff & Jefferson（1977）による修復の定義を、発話、聞き取りおよび理解に関する様々な問題に対処するために参加者自身が行う活動であると述べている。本事例では、問題源を含む発話をした話者自身による自己修復が生じていると考えられる。

1・2行目ではチケットに関する質問—応答のやり取りがC5とN3によって行われる。その後、C5がN3の答えを受けた上で、チケットの値段に対する評価を産出し始める。この断片では、質問—応答の基本連鎖の後続拡張部⁹で2回の引き取り現象が発生している。C5が3行目で「ジャニーズ」という別のアイドルグループの名前を提示すると、4行目でN3は3行目のC5のターンを引き取り、統語的続きとしてデザインされた形で発話を産出する。さらに、N3による先取り完了のターンは、5行目でC5によって再度引き取られる。

3行目～5行目でN3とC5がお互いに発話を引き取り合い、協働的にターンを構築できたのは、先行発話の続きをその時点で十分に予測できたためだと考えられる。予測を可能にする要因を詳細に確認していきたい。1回目の引き取り（3・4行目）に関しては、次の3つの言語的資源の産出により、発話の進行が予測可能になる。まず、3行目でC5の「あじゃあ」という発話は、C5がN3の2行目の応答を踏まえて、自分の理解を示そうとしているように見える。さらに、3行目でC5は副詞である「大体」と産出することで、2行目で示された具体的な数字と関連づけ、何かと比較しようとしていることが予測できる。また、次の「ジャニーズ：：」という語も、話題となっているある女性歌手のチケットと関連づけて比較するために提示したことが予測でき、「なんか」と「ジャニーズ」と言いよどんでしまったことも引き取りの契機となっているといえる。そして実際、N3はC5の発話を引き取って完結させる。

次に、2回目の引き取り現象（4・5行目）を見ていく。C5が3行目のTCUを開始した先行話者であることから、4行目におけるN3の引き取り発話の内容的な方向性を予測することは極めて容易であるが、実際にどのような言語形式で発話が産出されるかまでは確実に予測することは難しい。たとえば、C5の「ジャニーズ」の後で、N3が「の3分の2になる」と続ける可能性もある。しかし、「より↓は」が産出されたことによって、「多い・少ない」というような形式の比較がなされることが予測可能になったのである。実際にC5が5行目で「少ない」と産出するものの、それは「チケットの値段」を形容するには適切な表現ではない。そのため、C5はN3の「少し」（4行目）という程度副詞の産出を受けて自己修復を行い、N3とほぼ同時に「安い」を産出する。つまり、N3の発話を聞いた時点で、C5は値段に関する何らかの形容詞表現を産出しようとしていたことが理解可能となり、結果として「安いですね」と述べるのである。C5のこのような引き取りは、N3の発話の途中に挿入される形で行われており、CNがJNの発話内容を先読みしながら積極的に協働しているといえる。CNがJNによる先行発話との重なりの中で自らの表現を修正するこの行為は、接触場面に特有の協働的相互行為の実践といえる。さらに、この2回目の引き取り現象のような「XよりはY」という比較構造は、話の展開を予測しやすく

⁹ 連鎖の拡張は、基本連鎖である隣接ペアの直前、間、直後の3つの位置で発生する可能性があり、それぞれを先行拡張、挿入拡張、後続拡張という（高木ほか2016, 109）。

し、引き取りの契機となると考えられる。この断片における2回の引き取りはそれぞれ「協働的ターン連鎖」のタイプAおよびBに該当する。

本節では、予測を可能にする要素として「統語的構造」と「比較表現」の事例を検討した。実際のデータから、先行発話と統語的に関連する構造が共起することにより、発話の引き取り手が先行発話のTCU完結を予測可能性が高まると考えられる。また、CNがJNによる引き取り発話を受けて、JNが用いている語彙を再利用する形で自己修復を行う現象は、接触場面に特有の現象である可能性があると考えられる。

4.3 引き取りが生じるタイミング

断片1～3では、「協働的ターン連鎖」の2つのタイプについて検討した。本節では、それらとは厳密には異なり、変則的な形で引き取りが行われている事例に着目する。具体的には、収集したデータの中でしばしば観察される、先行話者が発話の途中で言葉を探しながら言い淀む場面において、後続話者がその発話を引き取る現象である。

この遅延の現象には、言葉探しや言い淀みに加え、間合いや笑い、視線などの非言語的行為が共起する場合もある。特に、これらの言語的・非言語的な滞りが同時に現れる場合、後続話者による引き取りが生じやすくなる傾向がある。以下に示す事例は、これらの複数の要因が組み合わさることで引き取りが生じた例である。断片の前、C1はある図書館で毎週勉強していることについて話している。

[断片4] [図書館]

1. C1: あの,一階の掲示板(.)に,あのう新聞の貼って(.)あります.
2. C2: あ : : :
3. C1: その新聞を(.)読んで,練習°します°.
4. N1: うん,日本の新聞を
5. C1: はい,日本の=
6. N1: =をとって図書館
7. C1: はい.
8. N1: 練習(.)練習(.)[で-
9. →C1: [中国,あ,きh記事(.) ¥し (h) ん (h) ぶ (h) んを : あ-=
10. ⇒N1: =記事が[ありますよね↓.うん.
11. C1: [°はい°
12. C1: はい.

C1は1行目の発話において、図書館での勉強方法の一環として掲示板に貼られた新聞の存在を説明している。1行目でC1は「あの」や「あのう」などの曖昧な表現を発話し、間合いが差し挟まれている。さらに「新聞が」を「新聞の」とする助詞の不適切な使用からも、日本語が流暢でないことが示されているといえる。C2は2行目で「あ : : :」と引き延ばした応答を行い、新たな情報を受けたことで自身の認識状態に変化が生じたこと、す

なわち「認識の更新」（Endo 2018）とC1の発話への理解を示す。これを受けて、C1は3行目で説明を続け、勉強方法についてさらに具体的に述べる。

その後、N1は4・6・8行目で「日本の新聞」であることや勉強方法について自分の理解を述べている。N1は4行目で、C1の言う「新聞」が「日本の新聞」であるかを明示的に確認しようとするが、助詞「を」で区切っており、発話が完結していないように聞こえる。N1にとって、日本語学習の方法として「日本の」新聞かどうかは重要な点と捉えられているのだろう。C1が5行目で肯定的に応じた後、N1は6行目で助詞「を」から発話を再開し、4行目の続きであることを示すとともに、このやりとり全体が図書館でC1が行う活動（1・3行目）に関するものであることを確認する。これに対し、C1は7行目で再び肯定的に応答する。N1は8行目で、自分が今述べたような方法でC1が日本語の練習を重ねていることを理解したことを示す発話を産出している。ここでN1の発話は、キーワードを拾いながらあえて文法的に未完結な形（「日本の新聞を」「をとって図書館」「練習(.)で」）で構成されており、C1が続きを話せるようターン進行を支援するデザインとなっている。また、4・6・8行目でC1の発話を繰り返すことで、認識の更新と理解の表示を同時に示している。

そして、C1は9行目で中国に関する記事についての発話を試みる。しかし、N1はC1の9行目の発話が完結に至る前に、先行発話を引き取る。そして10行目でN1は、C1が言おうとしていた内容を推測し、自分の理解候補を提示することで発話を完結させる。10行目N1の発話末尾には「よね」が用いられており、自分の理解に対するC1の確認要求がなされている。ここでC1の9行目の発話に注目すると、単に文末が中断されたことだけでなく、笑いや間合い、音の引き伸ばしなどの言語的特徴から発話の進行が滞っていることがわかる。実際の映像からも、9・10行目にかけてのC1は、目線の移動や手振りといった非言語的な手がかりを用いて、言語的表現の困難さを示していることが確認できる。（下記の図4を参照）



図4：9・10行目のスクリーンショット

図4は、9・10行目における映像のスクリーンショットの流れを示したものである（話者の目線の移動は矢印で示されている）。①では、C1が9行目で「中国、あ、」と発しつつ左上に視線を逸らし、自分の言いたいことを思い出そうとしている。②では、C1が「きh記事(.)」と産出しながら、N1に向けて新聞紙の形を描くようなジェスチャーを行う。③では、C1が「¥し(h)ん(h)ぶ(h)ん」と発しながら、手元のパンフレットを取り上げ、それを新聞にたとえて述べている。④では、一連の仕草を終えた後、N1がC1の発話を引き取って完成させている（10行目）。C1によるTCUの産出が滞っている場面では、言語的・非言語的要素が重なることが観察される。これらの要素が滞りを引き起こしたのか、あるいは滞りによって顕著になったのかは明確でないが、相互に関連する現象として、結果的にTCUの産出が滞ったことが確認される。そのため、N1はC1の発話を引き取ることで相互行為の進行性を回復しようとしたと考えられる。そして、9行目のC1の発話には、文法的な連続性はないものの、「中国」「記事」「しんぶん」という三つのキーワードが含まれている。これを踏まえてN1は、おそらくは「新聞に中国の記事が掲載されている」という理解のもとに、「記事がありますよね」と発話を完結させつつ、C1に確認を求める。その後、12行目でC1が確認を与えることで、「協働的ターン連鎖」が閉じられる。このやり取りは一見、図3で示したタイプAに該当するように見えるが、厳密にはそうではない。なぜなら、10行目におけるN1の発話は、C1の発話に対して統語的な継続としてデザインされているとは言いがたいからである。つまり、C1が進行中の発話の途中でN1はそれに文法的に接続する発話を産出したわけではない。N1は9行目でC1が産出した発話を踏まえ、「記事がありますよね」と独立した構文の発話として理解候補を提示しているのである。このような応答のあり方にこそ、接触場面における引き取りの特徴が表れているといえる。

断片4では、N1は日本語が流暢でないC1の発話を理解しながら、ターンの進行を助ける協働的な行為を繰り返し行っているといえる。このような接触場面に特有の相互行為上の特徴、すなわち非母語話者の発話の滞りや非言語的手がかりに対して、母語話者は積極的に発話進行を補助することが顕著に現れている。また、発話進行を遅延させている複数の要素（言語的産出の困難、非言語的手がかり、間合いなど）が重なって作用することで、引き取りの契機が高まる傾向が見られるという点も、接触場面に特徴的な相互行為の一側面であることが示唆される。さらに、本事例における協働的な発話構築は、参加者間の言語能力の非対称性とそれに対する調整がより顕在化する接触場面ならではの相互行為の展開を示すものだといえる。

本節では、引き取りが生じやすい機会である先行発話の進行の遅延の特徴を検討した。次の4.4節では、3者間の接触場面において知識の分布に偏りがある状況で、「引き取り」がどのような相互行為を遂行しているのかを検討する。

4.4 引き取りの連鎖を通して達成された「共同説明」

引き取りの成立には、話者の話題に対する認識的スタンス¹⁰が重要な役割を果たす。本節では、断片5・6をもとに、会話参加者が共有知識を示すことで共同説明を達成する行為の様相を検討する。共同説明とは、Lerner & Takagi (1999) および申田 (2002) による概念で、複数の参加者が共有知識を持ち、それを共有しない別の参加者に向けて説明が行われるシーケンスである。断片5の前では、N2、C2、C3の三人は中国に派遣された日本人マネージャーが5年を経た後帰国するという会社の決まりがあることについて話していた。

[断片5][お土産]

1. N2: 今-今なんか、あのう(.)中国にいるお友達から [日本で何か買って送ってくだ
2. C2: [。はい。
3. N2: さいって
4. C2: ehehe he[hehehehe
5. C3: [hehehe[he
6. N2: [頼まれることがありますか。
7. C2: ¥ありますehehehe
8. C3: [うん、あります。
9. N2: [どんなもの: ?
10. C2: なんか化粧品[。とか。
11. N2: [化粧品↑品
12. C2: 化粧品とかあのう: <カメラ>はちょっと貴重もの[ですから、だめで[した。

¹⁰ 認識的スタンス (epistemic stance)とは、相互行為の中でその都度示される。ある事柄についての会話の参加者の理解の度合いや態度のことを指す。これは、相互行為における他の参加者の(想定された)知識状態と相対的に決められるもので、他の参加者と比べてより知識があることをK+、より知識の少ないことをK-という形で表示する (Heritage 2012; 中馬2019)。

13. N2: [うんうん: [うんうん.
 14. →C2: 化粧品とかあのう腕時計とか
 15. N2: うん?うん[: :
 16. ⇒C3: [あと薬とかドラッグストアの[()]とか [hhh
 17. C2: [ああ,そうです. [はい.
 18. N2: [あ-ドラッグか.

N2は1・3・6行目で、中国の友達から日本で買い物を依頼された経験があるかという質問を産出する。この際、C2とC3は共に聞き手としてこの発話が産出されている途中で笑い始めることで、N2の言おうとすることをすでに理解できていること、すなわちN2よりも高い知識アクセスを有するK+の認識的スタンスを示している。このことは、2人とも7・8行目で端的で断定的な肯定的反応を産出したことから裏付けられるといえる。C3が8行目で承認を示すと同時に、N2は「どんなもの: ?」と新たな質問を産出し、C2は先にターンを取って言葉を探しながら化粧品の例を挙げる（10行目）。N2は極端な上昇調の音調で「化粧品」を復唱し（11行目）、驚きを示す。C2はさらに12行目で化粧品の例を繰り返した上で、次にカメラが頼まれるものに入らない理由を述べる。N2はこの説明に対して13行目で「うんうん:」「うんうん」と繰り返し応答し、C2の説明を受け止める。14行目でもC2は「化粧品とかあのう腕時計とか」とリスト形式で例示を続ける。これに対して15行目N2の発話「うん?うん[: :」の最初の「うん?」は、語尾が上昇調で発せられており、C2の挙げた「腕時計」という語に対する軽い驚きや理解の確認を示しているといえる。ここでの上昇調は、腕時計が前述のカメラと同じく「貴重品」に分類されたことに対して、それが「頼まれたもの」に含まれる点への一時的な違和感や納得への躊躇を表していると考えられる。しかし、続く「うん[: :」は音を引き伸ばしながら平調に移行し、C2にターンを続けることを促す。15行目の「うん」が引き伸ばされるタイミングで、C3は16行目で「あと」と切り出し、続けて薬の例や「ドラッグストアの()」という具体的な場所に関連する物品を挙げる。つまり、C3はC2が発話を続行する前に、C2の発話を引き取り、C2と類似したリスト構造「とか」を産出する（16行目）。そして最後に、C2が承認を与えることで「協働的ターン連鎖」を終わらせる（17行目）。

9行目のN2の質問に対してC2とC3が共同で発話を産出することができるのは、N2の1・3・6行目での質問がC2・C3の2人に向けられたものだからである。この質問に対し、C2とC3が7・8行目で肯定的な反応を示すことで、次の「どんなもの」という質問に応答する権利と義務が発生するといえる。N2の質問に対して、C2は自分の経験を活かして先に例を挙げ、続いてC3がリスト構造を示す「とか」を用いて情報を補足しながら応答する。なお、C2とC3の経験はそれぞれ異なるため、N2の質問に対して異なる応答を産出することも可能だったといえる。しかし、二人で一つの発話として応答を完結させることで、2人の「共通の成員性」（串田2002）を示すことができたといえる。

このように、3名以上の参加者による接触場面においては、そのときどきのトピックに応じて、言語文化を共有する者が「共通の成員性」を示しやすいと考えられる。しかし、必ずしも言語文化の共有が「共通の成員性」を構成する契機になるわけではない。異なる母語を持つ参加者の間でも、ある特定の経験を共有していれば共同説明を産出することが可能になるともいえる。その例として、断片6を見ていく。断片の前で、参加者たちは日本の俳優と歌手に関する話題を取り上げた後、日本でコンサートが開催される場合について話している。

[断片6][倍率]

1. C5：なんか、この前嵐のチケットを取りたいんですけど、なんか本当に↑取↑れないです。=
2. N3：=うん、取れないね[：
3. C5： [↑マジで、
4. C4：高いですか？
5. →C5：(h)高いじゃなくてなんか[現実：
6. ⇒N3： [倍率がすごく[：高[くて、当たらないみたい、
7. C5： [そう（倍率）
8. C4： [あ：：
9. C4：え：：：

C5は、1行目で自身の経験に基づき、嵐のチケットが「取れない」ことを述べ、不満を提示している。これに対し、N3が2行目で「うん」と素早く応答した後、C5の発話を繰り返す形で「取れないね」と発し、C5の評価に同意を示している。この「ね」は、C5の「取れないです」という評価に対する明示的な同意応答であると同時に、協調的な応答であることも示している（森田2008）。続く3行目の「↑マジで」は、N3の「取れないね」という同意応答を受けて、C5がそれを強く受け止める形で返した発話である。上昇ピッチは伴っているものの、驚きを示すのではなく、評価への強制的な受け止めとして働いていると解釈できる（Heritage 2002）。この一連のやり取りから、C5とN3は当該歌手グループのチケット取得の困難さに関する共通の知識を有しており、この話題に関して両者がK+の認識的スタンス、つまり、当該トピックについて自らを「よく知っている側」として位置づけて発話していることがうかがえる。

その後、4行目でC4が「高いですか」と極性質問を提示する。そうすることで、チケットが取れない理由を「価格」の問題として捉えようとしているといえる。これはC4のK-の認識的スタンス（C5とN3と比べてより知識が少ない）を反映した知識探索的質問である。これに対し、C5は5行目で「高いじゃなくて」と否定し、発話中に笑いを交えることで、C4の理解の枠組みがややずれていることを指摘する。その後の「現実」と音を引き延ばしながら、「価格」から「現実的な問題」として発話を続けようとしていることがわかる。同時にC5が「なんか」と言い淀んだ瞬間にN3は「倍率がすごく高くて、当たらな

いみたい」と発話し、C5が言おうとしていることを引き取って産出している。N3の「倍率」という語の提示は、C4の「高い」が「価格」を意味しているという理解を踏まえてより妥当な説明（倍率）を提示するものである。また、C5は7行目で「そう」と即座に応答し、N3の応答が自身の意図する説明と一致していたことを明示する。一方、C4は8・9行目で「あ：：」や「え：：：」といった感動詞を産出し、それぞれ認識の更新（Endo 2018）、想定からの逸脱への気づきを示す（林2009）。

以上のやり取りでは、C4の質問に対してC5とN3が協働的に応答を構築し、「チケットが取れない理由」を「価格」から「倍率」へと移行させていった。その過程は、知識の非対称性（epistemic asymmetry）（Heritage 2012）に基づく相互行為の中で、認識枠の調整を伴う協働的構築の良い例だといえる。特に、N3の自発的かつ適切な語彙の提供と、それに対するC5の即時的同意は、スムーズな「協働的ターン連鎖」を可能にしているといえる。ここで見られるのは、知識の非対称性を前提とした語彙調整であり、「接触場面」の一般的に特有というよりも、特定のトピックにおいて誰がどの程度の知識に関する認識を持っているかという文脈的判断に基づいた協働的発話である。すなわち、社会的カテゴリーとしての「母語話者／非母語話者」が自動的にレリバントになるのではなく、話題ごとに再構成される参与枠組みや志向の共有が、相互行為の実践において重要な役割を果たしているといえる。

5. まとめ

本稿では、3者間の接触場面における発話の協働構築の一つである「引き取り」に注目し、複数の事例に基づいて相互行為を詳細に分析した。その結果、以下の点が明らかとなった。

まず、串田（2006）が指摘した「協働的ターン連鎖」のタイプA・Bを検証した。これら二つのタイプについて、次の二点を明らかにした。1点目は、「協働的ターン連鎖」における第2位置の「先取り完了」の「完了」は文法上の完結ではなく、一つのTCUの行為単位としての完了であるということである（断片1）。2点目は、タイプBにおける先行発話が後続話者の発話とオーバーラップする部分において、後続発話は先行発話と意味的にはほぼ同じ内容を産出しうる一方で、必ずしも全く同じ言語形式が産出されるとは限らないことが明らかとなった（断片2）。

次に、後続話者は文法的・意味的な言語資源を手がかりとして、先行話者が何を産出しようとしているのかを十分に予測でき、引き取ることが可能になっていることが確認された。具体的には、格助詞の後に現れる述語が予測される統語的構造（断片2）や、「XよりはY」という「比較」の構造が予測可能性を高める場合（断片3）が観察された。これらの現象は、母語話者間の会話でも確認されうる普遍的な現象と考えられる。

一方、言語的・文化的背景が異なる参加者からなる接触場面に特徴的と思われる現象も確認できた。断片2では、「協働的ターン連鎖」における承認の位置で、CNがJNの語彙を再利用する現象が確認された。このやり取りは、CNの発話がJNに引き取られ、語彙的修正が加えられた後、その語彙をCN自身が再利用し、自己修復するという語彙選択をめぐる相互行為的な調整過程が示されていた。接触場面における語彙的同調は、母語話者と非母語話者間の語彙や文法知識の差異により、修正や再利用のプロセスがより顕著に現れるという特徴がある。さらに、断片3で観察されたように、CNがJNの先行発話と重なりながら自らの言語表現を修正する様子が観察され、発話の重なりの中でも生じうる現象である。こうしたやり取りにおいて、CNがJNの語彙を再利用・修正するプロセスは、語彙的同調の一側面といえる。

加えて、言語表現のみならず、発話の進行性を遅らせる間合いや笑い、視線や身体動作といった非言語的要素が協働的に作用することで、引き取りの契機が高まる傾向が確認された（断片4）。これらの非言語的要素の協働的利用も普遍的現象の一つと考えられる。しかし、JNによる引き取りは、CNの先行発話と意味的な連続性を持つものの、必ずしも同一の言語形式を再現するわけではない。特に、CNによる不完全な発話に対して、JNは発話に含まれるキーワードを手がかりに、独立した文を先取り完了の形で補完・展開する発話が見られた。こうした相互行為は、接触場面に特有の協働性を示すものである。

さらに、接触場面において複数の話者が協力して一つの説明を構築する「共同説明」（断片5）といった相互行為的ふるまいも観察されることを示した。特に、先行発話の構造や統語的な予測に基づいて発話を完結させることで、共同説明が円滑に行われる。こうしたやり取りには、知識へのアクセス可能性と、認識的スタンスの共有が重要な役割を果たしていることが示された。接触場面では、参加者が異なる言語的・文化的背景をもつため、言語文化に関わる知識や理解については、参加者間で差異が生じやすい。そのため、互いの知識や言語能力の違いを補い合う協働が促され、これらの差異が相互行為の資源として活用されるのである。ただし、言語文化の共有が常に「共通の成員性」を構成するとは限らない。このことから、「母語話者／非母語話者」という固定的な社会的カテゴリーよりも、話題に応じて動的に構築される参与関係や志向の共有こそが、相互行為を形づくる上で重要な意味を持つことも示唆されたといえる（断片6）。

本稿は、接触場面における「引き取り」が単なる発話の補完にとどまらず、参加者間の意味の協働や関係性の調整を支える重要な相互行為的資源であることを明らかにした。特に、三者間の会話においては、「引き取り」によって滞った発話の進行性が回復され、参加者のスムーズな順番交替への強い志向が確認されたといえる。ただし、本稿の知見は限定的なデータに基づくものであり、今後さらなる大規模データによる検証が必要である。

特に「語彙的同調」や「共同説明」に接触場面特有の特徴がある可能性が示唆されたが、データを増強して母語場面との比較分析をさらに進めることが今後の課題である。

参考文献

日本語文献

- 宇佐美まゆみ（2006）「話し手と聞き手の相互作用としての『共同発話文』の日英比較」高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会（編）『高見澤孟先生古希記念論文集』103-130.
- 串田秀也（2002）「統語的単位の開放性と参与の組織化(1)：引き取りのシークエンス環境」『大阪教育大学紀要：第二部門』50/2: 37-64.
- 串田秀也（2006）「『そう』と『うん』：ターンスペースと行為スペースへの参加の再組織化」『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』第5章世界思想社、157-204.
- 串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房
- 高木智世・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房
- 水谷信子（1993）「『共話』から『対話』へ」『日本語学』4、明治書院、4-10.
- 中馬隼人（2019）「日本語の会話に見られる認知的スタンスの調整」『社会言語科学会第43回大会論文集』26-29.
- 林誠（2017）「会話におけるターンの共同構築」『日本語学』36/4: 128-139.
- 森本郁代（2002）「発話権の尊重と会話進行：日本語母語話者と非母語話者の会話に見られる『引き取り』をめぐって」『平成11-13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書』59-78.
- 森田笑（2008）「相互行為上における協調の問題：相互行為助詞「ね」が明示するもの」『社会言語科学』10/2: 42-54.

外国語文献

- Endo, T. 2018. The Japanese change-of-state a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123: 151-166.
- Hayashi, M. 2009. Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41/10: 2100-2129.
- Hayashi, M. 2003. Language and the body as resources for collaborative action: A study of word searches in Japanese conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 36/2: 109-141.
- Heritage, J. 2002. The limits of questioning: Negative interrogatives and hostile question content. *Journal of Pragmatics*, 34/10-11: 1427-1446.
- Heritage, J. 2012. The epistemic engine: sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language & Social Interaction*, 45/1: 30-52.

- Lerner, G.H. 1991. On the Syntax of Sentences in Progress. *Language In Society*, 20/3: 441-458.
- Lerner, G.H. and Takagi, T. 1999. On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: A co-investigation of English and Japanese grammatical practices. *Journal of Pragmatics*, 31/1: 49-75.
- Lerner, G.H. 2004. Collaborative Turn Sequences. In G.H. Lerner (ed.) "Conversation Analysis: Studies from the First Generation." John Benjamins, 225-256.
- Sacks, H. 1995. "Lectures on Conversation, Volumes I and II Edited by G. Jefferson with Introduction by E.A. Schegloff." Blackwell.

付録：本稿で使われる転記のための記号の一覧

(高木ほか2016: 353より)

[]	音の重なり	↑	音の急な上昇
=	発話の密着	↓	音の急な下降
(0.0)	沈黙・間合い (秒)	° °	小さな音量
(.)	短い間合い	<>	遅いスピードの発話
::	音の引き伸ばし	> <	早いスピードの発話
.	語尾の音調が下がっている	hh	呼気音
,	語尾の音調が少し上がって 弾みがついている	.hh (hh)	吸気音 発話の中の笑い
?	語尾の音調が上がっている	()	聞き取りに問題のある 発話 (又は (...))
<u>下線</u>	音の強調		